

1st announcement

Myeloma Conference

骨髄腫の臨床像の奥深さ
～えっ、こんな事が骨髄腫で！？～

日時 平成29年**1月14日** (土) **13:30 ~ 15:50**

場所

アバローム紀の国 【5階 カトレア】

〒640-8262 和歌山県和歌山市湊通丁北2-1-2

TEL : 073-436-1200

開会挨拶

園木 孝志 先生
和歌山県立医科大学医学部
血液内科学 教授

演者

三輪 哲義 先生
国立国際医療研究センター
血液内科 血液疾患特任診療部長

座長

西川 彰則 先生
和歌山県立医科大学医学部
血液内科学 助教

≪ Program ≫

13:30-14:40 症候学編

14:50-15:50 治療編

講演会終了後、情報交換会をご用意しております。

主催 **セルジーン株式会社**

【ご参加される先生方へ】

ご存知のように、多発性骨髄腫は、多様な臨床症状を呈する疾患です。主症状は、造血障害、骨障害、腎障害、高カルシウム血症であり、これらの4症状は、IMWGによる各種のコンセンサス報告でも骨髄腫を定義できる代表的な症状として位置づけられています。しかし、実臨床では、これらの4症状以外にも、多様な臨床症状を有する症例を経験する事が少なくないと思います。

アミロイドーシス、過粘稠度症候群のような頻度の高い合併症のほか、出血症状とは逆の血栓形成傾向、cryoglobulinemiaやcrystal globulinemiaなどを含む蛋白分子異常症(proteinopathy)、高アンモニア血症、さらには進行期で頻度の高い髄外病変による臓器障害など、多岐にわたる症状が含まれます。

頻度は高くありませんが、骨髄腫に伴う多様な症候群も知られています。Bing-Neel症候群、Fanconi症候群、restless leg症候群、Schnitzler症候群、Trousseau症候群、などは以前から報告されています。しかし最近では、奏効率の高い治療薬が登場していることもありImmune reconstitution syndrome(IRIS)、posterior reversible encephalopathy syndrome(PRES)、tumor lysis syndrome(TLS)などの頻度が、臨床の現場でも増加しつつある現状です。加えて、強皮症に類似する皮膚硬化を示すstiff skin syndromeが、ASCTで軽快することも知られています。

新規薬剤を含む多様な治療戦略が導入され続けていますが、これらにより患者様のQOL/ADLに影響する、上記症候群までを含めた諸症状を如何に改善できるかが、実地臨床の主要課題であり続けると考えております。

今回の小咄?では、このような、最新の方法論を用いた臨床像の詳細な把握を基盤として、多発性骨髄腫の臨床像および治療学の奥深さを、共に学ばせて頂くと共に、今後登場してくる新規薬剤を含めた治療戦略も共に考えさせて頂ければ幸いです。

骨髄腫の基本から応用編まで、実地臨床での多岐にわたる経験に基づいたエピソードを交えつつ、お話しさせて頂ければと考えています。意義深い土曜日の午後にできれば有り難いですね。



三輪 哲義

Access & Map

アクセスマップ

